

『庭園の何処かに潜伏していると仮定される盗賊の行方に関する一考察
く羽柴邸に於ける旧ロマノフ家のダイヤ盗難事件を基にく』

脚本 遠藤 雄史

原作 江戸川乱歩

『怪人二十面相 私立探偵明智小五郎』

『D坂の殺人事件』

【あらすじ】

昭和十一年、秋。大物実業家・羽柴壮太郎の屋敷の庭園には、一人の盗賊が身を潜めていた。その盗賊とは、軍靴の音すらかき消す話題の盗賊、怪人二十面相。怪人二十面相は、羽柴氏の家宝旧ロマノフ家のダイヤを盗んだのだった。羽柴の屋敷に住む書生たちは、庭園の何処にいる賊についてお互いの意見を交わし合う。それぞれの考えが交錯する中、事態は思わぬ方向に…

【登場人物】

本明・・・・・・・・羽柴家の書生
 遠山・・・・・・・・羽柴家の書生
 藤原・・・・・・・・羽柴家の書生
 平井・・・・・・・・羽柴家の女中長
 吉田・・・・・・・・羽柴家の女中

【名前のみ作中に出てくる人物】

怪人二十面相・・二十の顔を持つと言われる盗賊
 羽柴壮太郎・・大物実業家
 羽柴壮一・・羽柴壮太郎の長男
 羽柴壮二・・羽柴壮太郎の二男
 羽柴早苗・・羽柴壮太郎の長女
 近藤老人・・羽柴家の執事
 松野・・羽柴家の運転手
 中村・・警視庁捜査係長
 明智小五郎・・日本一の名探偵

時は昭和十一年秋。
実業界の実力者、羽柴壮太郎の邸宅内にある書生部屋。
部屋の片隅に机。机の上には3つのコップと水差し。他には椅子が三つ。
サイドチェストが一つ。
疲れ切った表情で羽柴家の書生遠山が部屋に入って来る。
遠山の手には木刀。

遠山
…。

遠山は木刀を壁にかけ、椅子に腰かけようとすると、

本明
遠山君。

と、本明が木刀を手に入ってきた。

遠山が椅子に腰かけようとしている様子から察し―

本明
行こうじゃないか。休んでいる暇はないぞ。

遠山
…。

遠山はしぶしぶ、木刀を手にする。

本明は木刀を手にした様子を見て―

本明
私たちの手で賊を捕まえよう―

と、部屋を出て行く。

遠山は本明が部屋を出て行ったのを見て、また、木刀を置く。

水差しが目に入り、机の前に歩く。遠山は水差しを見て、怪訝な様子。
少し、間。

遠山がコップを取り、水を入れようとしたとき、また、本明が扉を開け―

本明
遠山君、行こうか。

と、また、声をかけるが…

遠山
…。

本明
どうかしたかい？

本明は遠山が水差しの前でコップを持っている様子から察して―

本明
水なんか、いつでも飲めるじゃないか。

遠山 水が飲みたい。

本明 賊が逃げてしまおうぞ。

遠山 俺は水が飲みたい。

本明 何を子どもみたいないなことを。皆が待っている。行こう。

遠山 どうせ行つたつて、書生が何しに来たとバカにされるだけだ。―嫌だね。

本明 そんなことはない。人手は欲しいはずだ。

遠山 君だつて感じただろ。

本明 聴取を記録していた、あの若い警官のことかい？ 確かに私たちが答えるた

びに薄ら笑いを浮かべていたね。

遠山 あの若い奴だけじゃない。あの部屋にいたお巡り、全員が俺たちを小バカにしていた。書生なんてなんの役にも立たんつて顔に書いてあった。―不愉快だ。

本明 捕まえられなかったのは事実じゃないか。

遠山 俺たちが悪いのか？

本明 そういふわけじゃない。

遠山 門長屋に住んでいるお巡りとそのお友達のお巡りだつていたじゃないか。俺たちを責めるなら、賊を捕まえられなかった罪で彼奴等を首にしてもらいたいね。

本明 遠山君。

遠山 我慢ならん。―夜通し表門で見張りをしていたのは、誰だ？

本明 私たちだ。

遠山 だから、二十面相は逃げられなかった。―そうだろう？

本明 その通り。それは、警察だつて認めていたろ。

遠山 ―君の態度にも腹が立った。

本明 私の？

遠山 彼奴等が何か言うたびに、「申し訳ございません」「申し訳ございません」と―米つきバツタのように。

本明 処世術だよ。

遠山 何が処世術だ。君はそういう節がある。いいか、俺たちは羽柴壮太郎氏の書生だ。二十面相を捕まえられなかったことを謝るなら、それは壮太郎氏にだ。

本明 分かっているよ。しかし、無理に事を荒立てる必要もないだろう。

遠山 我々は被害者だ。あの怪人二十面相に狙われ、家宝であるダイヤを盗まれた。

同情されて然るべきだ。しかし、彼奴等ときたら、狙われるのはさもありなんと

言わんばかりじゃないか。日本皇国が大不景気なのは壮太郎氏が悪いのか？ ダ

イヤを持つているのが悪いのか？ 富を持つているのが悪いのか？ 壮太郎氏の富は、壮太郎氏の実業家としての実力なはずだ。

本明 落ち着きたまえよ。

遠山 いいや、落ち着かないね。あの希代の悪党、怪人二十面相を野放しにしてい
るのは警察の方ではないか！ 何度も何度も取り逃がしやがつて、無能の極み
だ！

本明 警察に聞かれたら、大事になる。

遠山 暴力などに屈しないぞ！ ペンは剣よりも強し―

と、そこに勢いよく扉を開ける音。

遠山
！

遠山は警察が踏み込んできたと勘違いをするが、扉を開けたのは同じ書生の藤原だった。手には木刀を持っている。

本明 藤原君！

遠山 ふ、藤原君。―君ね、急に扉を開けるのはマナー違反だよ。君はそういう節がある。ノック、ノックをしなさい。ま、ノックは欧米の文化だがね。そうそう、ノックには正しい回数というのがある。四回、四回だよ。二回はトイレノックと言ってね、マナー違反―

藤原は遠山の話の全く聞いていない。

藤原は水差しを目に留めると、乱暴な足取りで水差し目掛けて歩く―

遠山 (その様子を見て) 聞いているのかい？

藤原はぞんざいにコップを手取るが―

藤原 本明君、ニツカはあるかい？

本明 あいにく切らしているんだ。

遠山 朝っぱらからウイスキーかい？

藤原 一睡もしてないんだ、夜だよ。

と、水差しからコップに水を入れようとするが―

本明 サントリ―はある。

と、サイドチェストからスキットルを取り出しながら―

本明 安もんだがね。

藤原 もらっても？

本明 もちろん。

と、本明は藤原にスキットルを手渡す。

藤原はコップにウイスキーを注ぐ。

遠山 国産もいいが、やはりウイスキーはイギリスだ。ブキャナンのウイスキーは

格別だよ。壮太郎氏のコレクションに入っていないはずだ。

本明 ここ数日、平井さんの目が厳しくて、ちよるまかせなかった。

遠山 あー、十年ぶりに帰ってくるようになったからか。

本明 いろんな銘柄の酒が揃えられていたよ。プキヤナンのレアオールドもあった。

遠山 レアオールド！？ 壮太郎氏も奮発したな。

本明 家出同然で行ったご子息が戻ってくる、それも成功してとなったら誰だ
って喜ぶさ。

遠山 それが二十面相―

藤原がウイスキーを飲み干し、コップを強く机に置く。

遠山 (びっくりしながら) どうした？

藤原 屈辱だ：あんな辱め：

本明 辱め？ 取り調べでかい？

遠山 そうだろう。彼奴等、書生は役に立たんって態度で―

藤原はスキットルから直接、ウイスキーを流し込むように飲む

遠山 |ちよつと飲みすぎじゃないか。

藤原 君たちは、よく平気だな。

遠山 いや、平気ではない。だから、ここでストライキを行う。

本明 (からかうように) 私たちは労働者ではないよ。

遠山 (その言い方に呼応するかのよう) 外に出て汗をかくだから、一緒だ。

藤原 僕には、君たちのようにヘラヘラなんかできない。ふんどし一丁にさせられ、顔をぼろ雑巾で強くこすられ、さんざん調べた挙句、貧相な体とバカにされ、お前のような奴が二十面相なわけないと笑われ―

遠山 ちよつ、ちよつ、ちよつ、二十面相？ 君が？

藤原 ああ。君たちだって疑われたら？

遠山 俺たちが二十面相？

本明 どういうことだい？

藤原 こっちこそ聞きたい。なぜ、君らは疑われなかったんだ？

遠山 あ：松野君。

本明 ああ、松野君か。

藤原 松野君がどうした？

本明 君は、ずっと一人で見張りを？

藤原 ああ。僕以外、誰も来なかった。

本明 本当は、二人ずつなはずだった。表門は私と遠山君。裏門は君と松野君。

遠山 門長屋のお巡りからの指示でね。

藤原 しかし、彼は来なかった。

遠山 それもそのはずだ。松野君ときたら―あれは何時頃だ―二時ぐらいか。―弱々

しい足取りで俺たちの前に来て、額に手をあてながら「僕は寒気がしてしようがない。熱があるようだ。少し休ませて貰うよ」ときたもんだ。だから、「ああ、松野君か。いいとも休み給え。ここは僕達が引受けるから」と言っちゃったさ。所詮、学のない運転手だ。あの、大捕り物で参ってしまったというわけさ。―それはそうと、彼は、お巡りに伝えていなかったんだな。だから、ずっと君一人だったわけか。

本明 それにしても、君が二十面相だなんて馬鹿げている。

遠山 見張りだって、表門、裏門だけじゃない。外堀にだっていたんだ。門長屋のお巡りとそのお友だちが等間隔で見張っていたんだ。いくら夜中だって、月明かりで立っていたことは確認できていた。もしも二十面相に取って代わられるようなものならわかるはずだ。

本明 そもそも、二十面相が藤原君に変装する意味はない。

遠山 ん？

本明 例えばだよ、藤原君に変装するのなら、二十面相は藤原君を失神させなくちゃいけない。(遠山に) そうだろうか？

遠山 (あまり分かっていないが) その通り。

本明 藤原君が二人いることになってしまふからね。裏門は藤原君一人。だったら、二十面相は君を倒して、そこから逃げてしまえばいい。

遠山 その通り！

藤原 それは、僕も言った。

本明 そうしたら？

藤原 生意気だと警棒で腹をやられたよ。

遠山 彼奴等は学がないから、すぐに暴力で片を付けようとする。

また、藤原はスキットルから直接、ウイスキーを流し込むように飲む

藤原 よりによって警察なんかには…

本明 落ち着きたまえ。

遠山 (本明に) 君は、それでも外に行こうというのかね？

本明 腹の虫が治まらないか。

遠山 一泡吹かせてやりたいね。―なあ。

藤原 一泡じゃ足りない。

遠山 二泡でも、三泡でも吹かせてやろう！ 権力を笠に着ている奴らにぎやふんと言わせるのだ！ そうだろう、本明君！

本明 ちよっと待った。(扉に向かって)―盗み聞きはよくないですよ。

二人 ！？

本明 (扉の向かって) どうぞ。

遠山は顔を強張らせ、藤原は扉の方を睨み付ける。

平井 (開けながら) ごめんよ! 盗み聞きするつもりはなかったんだけどさ。

と、扉を開けて入ってきたのは羽柴家の女中長の平井だった。よくみると、右足首に包帯を巻いているようだ。しかし、その包帯のことは、この時点で誰も気づかない。

遠山 平井さん! 驚かせないでください。

平井 ちょっと心配になって来てみたんだよ。

本明 心配? 何がですか?

平井 (扉の方を見ながら) この子が、夜通し見張りをしていたあんたたちがふらふらしながら屋敷に戻って来たって言うもんだからさ。

三人が扉の方を見ると、そこには吉田が立っていた。

吉田は頭を下げる。

遠山 君は、最近雇われた。

吉田 はい。吉田と申します。――(本明に) 先刻は――

本明 (思い出し) ああ、いえ。

吉田 (平井に) 余計な心配だったかもしれませんが申し訳ございません。

平井 いいんだよ、そんな丁寧な物言いじゃなくて。言ってるだろ、あたしたち女中はご主人たちの前だけしゃんとしていればいいんだって。

遠山 俺たちはしゃんとするに値しないと。

平井 ただ飯しか食べていないんだ、仕方ないだろ。

遠山 いずれは学者か大臣ですよ

平井 それは楽しみだ。それはそうと、本明ちゃん、どうするんだい?

本明 : 平井さん、いい加減ちゃん付けはやめてくれませんか?

平井 こまいこと気にしない。察するに、あんたたちは名誉を傷つけられたっていうんだろ?

遠山 その通りです。

平井 このまま泣き寝入りするのは男が廃るってもんだ。そうだろう?

藤原 はい!

本明 煽らないでください。

平井 あたしたちだって警察には頭に来ているんだ。

本明 何があつたんですか?

平井 女中たちも取り調べ受けたんだ。そのとき、何人かの子が、二十面相が変装した姿じゃないかって、服を脱がされたって言うんだよ!

遠山 何だって!?

平井 あたしたちに変装しているわけじゃないじゃないか! あたしはね、女中頭として、親御さんから大切な娘さんを預かっているんだ! 嫁入り前の子たちになんてことしてくれたんだと思ってるね!

遠山 ひ、平井さん：

平井 なに？

遠山 こ、こ、小松さん…小松芳子さんは…？

平井 (首を横に振る)

遠山 小松さん…！

藤原 ま、まさか…浜口さんも…？

平井 ああ…

藤原 う、ううう…！

遠山・藤原はやり場のない怒りを感じている。

平井 あたしはされなかつたけどね…

藤原 うおおおおお！—許さん！

藤原が木刀を持って扉に向かう。

遠山 落ち着け！

藤原 いいや、落ち着けぬ！ 僕だけじゃなく、可憐な浜口さんを！

吉田 返り討ちに合うだけです。—盗み聞きするつもりはありませんでしたが、警察の取り調べのときに何もできなかつたようじゃありませんか。

藤原 それは…

吉田 浜口さんとしても、敵討ちに向かつて、あっさりと返り討ちに合う殿方をどう思うでしょうか？

遠山 心意気は感じるんじゃないか？

吉田 それは男性のエゴです。—はた迷惑でしかありません。

遠山・藤原 …。

本明 各々心中お察しするが、今、私たちがするべきことは、庭に出て賊を探すということだ。

遠山 冗談じゃない！ 彼奴等の手先になって働くなんてごめんだ！

平井 あんた、それでも江戸っ子かい！？

本明 生まれは岩手です。

藤原 (木刀を強く握り) 浜口さんのためにも、一矢報いたい。

本明 暴力はよくない。冷静になりたまえ。昨夜だって、私たちは警察と一緒に活動したではないか。

遠山 いいや、あれは違う。俺たちは壮太郎氏のために動いた。今、外に行くのは警察に指示されたからだ。

本明 目的は同じだよ。意固地になるな。

遠山 いや、逆に君が意固地になっている気がする。

平井 そうよね！

藤原 我々は警察に書生なゆえに見下され、嘲られた。浜口さん…いや、女中の皆

さんは辱められ、尊厳を傷つけられた。―本明君は悔しくないのか？

本明 認める。悔しい。でもね、耐え忍ぶことも大切だ。

藤原 耐えることにも限界はある。

平井 堪忍袋の緒だって切れるんだよ。

本明 「忍耐は人の宝なり」

平井 何だって？

本明 私が敬愛する郷土の大先輩、斎藤實先生の言葉です。斎藤先生は、様々なことに耐えて耐えて耐え忍んで、総理大臣にまで上り詰めた。

遠山 二・二六で殺されたけどね。

本明 身も蓋もないことを言うな。

遠山 それにだ、それにだよ、二・二六のとき、斎藤實の邸宅に警護にあたっていた警察たちは、陸軍将校の突撃隊に恐れをなし、尻尾を巻いて逃げ出したと言わないか。もしも、彼奴等が職責を全うしていたなら、斎藤實が逃げ出す時間ぐらいは稼げたのではないか。―責務を全うできない警察なんぞに手を貸す道理はない。

藤原 その通り！ 警察なんてものは、虎の威を借る狐だ！ いつも、そうだ。弱い者いじめを張り切るだけで、大事な時には逃げ出すような輩なんだぞ！

本明 ―議論は平行線だ。―勝手にしたまえ、私は行くよ。

と、本明は扉に向かう。

吉田 そんなに外に出たいのですか？

本明 ―え？

吉田 いえ、そう感じたものですから。

本明 実のしないことはしたくない。それだけです。

遠山 実がないだと？

本明 そうだろう？

藤原 につき警察に僕たちの意地を見せる必要がある。

本明 ここにいて、警察に一矢報いることができるのか？ 私たちが、もし警察の鼻を明かせられるとしたら、それは警察よりも早く二十面相を見つけたときだ。ここで閉じこもってストライキを行うことは、警察に負けを認めることと同じだよ。―違うかい？

遠山、藤原は言葉を返したいが、出てこない。

吉田 だったら、ここで見つけなければいいではありませんか。

全員が吉田を見る。

本明 ここで？ どうやって？

吉田 東京に偉い探偵様がいらつしやると聞いたことがあります。

平井 探偵？ ああ、新聞にも載ってたね。たしか…日本一の名探偵、明智小五郎。

吉田 はい。

平井 警察が匙を投げるような事件を解決しているんだろ。―二十面相を撃退したって記事は何度も見たことがあるよ！

本明 捕まえてはいませんよ。

平井 同じようなもんだよ。

本明 同じではないです。

遠山 (吉田に) それで？

吉田 明智探偵のように、二十面相が隠れている場所を考えるのです。

遠山 推理しろって？

吉田 はい。

遠山 (考え込む)

藤原 のった。―そっちの方が、一矢報いることができる。

平井 あたしもいいと思うね。あんたたち、無駄に考えるの好きでしょ。その頭でつかちのオツムでさ。

遠山 頭でつかちのオツムですか。

平井 そうだろう。若い男は兵隊さんになって取られ始めているこの時期に、まだこのうのと本なんか読んでいるからね。

遠山 ―まあ、俺達には合っているかもしれないですね。

本明 私は嫌だ。

遠山 本明君。

本明 あのペテンまがいのもじやもじや頭と同じことをしろというのかい？

平井 明智探偵のことかい？ 英国紳士のような美男子だって話だけどね。

本明 犯罪学者だと偉ぶっているだけです。

遠山 知り合いなのかい？

本明 ―知り合いではない。

藤原 君は推理小説が好きだったじゃないか。何冊か、貸して読ませてもらったよ。―甲賀三郎に浜尾四郎、それに「新青年」だって購読していたろ。

本明 何年前も前のことだ。―推理小説など下らぬものは、もう読んではいない。書生の本分は勉強だからね。

平井 でもさ、もしも、あんたたちで二十面相が隠れている先を見つけたら、それは日本一の名探偵を超えたってことだろ。

遠山 確かに。―警察が匙を投げた事件を解決する明智探偵よりも優れているとなれば、彼奴等の鼻も明かせる。

藤原 その通りだ！

遠山 本明君、どうだい？

藤原 僕たちには君の推理力が必要だ。

本明 ……

吉田 警察が来ないかは、私が外に出て見張っておきます。

遠山 ありがたい！

平井 やろうよう。

吉田 それとも、ここに居ることに何か不都合でも？

本明 ；分かりました。

遠山 そうこなくちゃ！ 二十面相が隠れている場所を、推理によって明らかにする。そして、汗水垂らして探している彼奴等を横目に、二十面相をあつさりで見つけ出す。

藤原 うむ！

遠山 「庭園の何処かに潜伏していると仮定される盗賊の行方に関する一考察」とでもすればいいか。

吉田 それでは、私は。

藤原 お願いします。

吉田が扉の外に出て行く。

平井 女中は初めてって言うてるけど、よく気が付くんだよう。

と、平井は外に聞こえるように言い、扉の方をちらりと見る。
吉田が部屋の中にはいないことを確かめ――

平井 (少し小さな声で) 旦那様の妾かね。

遠山 (同じぐらいの大きさで) 妾？ どうして？

平井 (同様に) 女中は、執事の近藤さんが連れて来るの。

遠山 (同様に) 近藤老人が。――彼女は？

平井 (同様に) 二週間前、突然、旦那様が連れて来た。――あの子だけ、大部屋じゃないんだよ。

遠山 (同様に) 怪しい。

平井 (大きく) だろう！

遠山 (小さく) 声！

平井 (慌てて、小さく) それに、夜中、何度か旦那様の部屋に入っていくのを見たって子が何人かいるんだよ。

遠山 (小さく) なんと！ あんなにきれいな奥様がいらっしゃるのに…。

平井 (大きく) 男と女だからね！

遠山 (小さく) 聞こえる！

平井 あ！

と、平井、口を押える。

と、藤原がスキットルを開けながら――

藤原 才媛であることは間違いないですよ。肝も座っている。妾というより、壮一

さんの奥方候補だったんじゃないですか？ — 今となっては、ですけど。 — だから、僕たちを焚き付けんじゃないかな？

遠山 俺たちを焚き付ける？

藤原 今から始まる推理合戦へ。 — それはそうと、本明君、吉田さんと何かあったのかい？

本明 ん？

藤原 入って来た時、先刻はどうもとか —

本明 電報をね

藤原 電報？

と、スキットルを口に運ぼうとする。

平井 あんた、何飲んでるの？

藤原 これは：

と、平井はスキットルを取り、においを嗅ぐ。

平井 どうりで、ときどき減りが早いはずだ。

藤原 これは：

平井 ただ飯食いは水でも飲んでりゃいいの！

と、サイドチェストの水差しを指さす。

藤原 ひどい：

平井 お国のために働くようになったら、いくらでも飲ませてあげるよ。

遠山 そうそう、気になっていましたんです、この水差しを準備してくれたのは平井さんですか？

平井 あたし？ なんで？

遠山 え？ — それじゃ、誰が？

本明 きっと、奥様だろう。

遠山 奥様が？

本明 夜通し、見張りをしていた私たちを労おうと置いてくれたんじゃないか。 — さあ、やろう。時間はない。

平井 そうだね。いつ、警察が来るとは限らないし。

藤原 警察が我々よりも早く見つけ出してしまいかもしれない。 — だから、それ返してください。気付けの一杯。

平井 全く、飲みすぎるんじゃないよ。

藤原 かたじけない。

と、藤原はスキットルを口に運ぶ。

藤原 くう！

遠山 さあ、どこからいこうか。

本明 まず、事件を整理したい。

藤原 さすが、推理小説マニアだ。

本明 今から三週間前、怪人二十面相から壮太郎氏に予告状が届いた。

平井 あの時はびっくりしたよ。—まさか世間を騒がしている盗賊、怪人二十面相から予告状が届くなんて思ってもいなかったからね！

藤原 しかも、新聞記事の通りなのは驚いた。誰もが壮一さんと疑わなかった。

平井 二十の顔を男の看板に偽りなし。

藤原 富豪、乞食、学者、無頼漢、いや、女にさえも変装する大泥棒！

遠山 女にさえ？

と、平井を見る。

平井 あたしに変装している可能性もあるね。

遠山 冗談ですよ。

本明 二十面相のことはいい。—先に進もう。

遠山 いや、敵を知ることが大切だ。

本明 言わせてもらうが、推理は物質的な証拠の積み重ねだ。二十面相だろうが、四十面相だろうが、そこら辺のコソ泥だろうが、証拠の前ではみな等しい。

藤原 しかし、研究には基本情報は必要だ。一人ひとりの素地を揃えることには意味のないことではないよ。

平井 二対一だね。—あたしが審判。

本明 (不服そうに「どうぞ」)

遠山 (「どうも」) 平井さん、書生は世の中に疎いところがありました、二十面相について知っていることを。

藤原 僕はそこそ詳しい。—本明君に推理小説を進められてから、少し興味をもつて、二十面相の記事を読むようになってね。

遠山 それじゃ、頼むよ。

藤原 この二十面相というのは、奇妙な盗賊でね、現金に興味はないんだ。盗むのは、きまって宝石だとか美術品。

遠山 この家に、そんなものがあるとは思わなかった。

平井 知らされてないだけ。—宝石、仏像、美術品に目がないんだよ、うちの旦那様は。欲しいと思ったものは必ず手に入れる。今回、盗まれたロマノフ家のダイヤ六つだって、ひどいもんだった。革命によって没落したロマノフ家からあの手この手で手に入れたのさ。満足そうに喋っていたよ。

藤原 ダイヤ六つも？

平井 そうだよ。

藤原 ずっと一つだと思っていました。

平井 六つ。

藤原 はく。いくらぐらいするもんなんですか？

平井 二十万。

藤原 二十万！？ 松坂屋の食堂でビフテキが何回食べられるんだ…？

平井 一生食べられるよ。―あれは、病気。実業界の大立者とか巷じゃもてはやされてるけど、一皮むけば強欲な禿げネズミさ。

遠山 禿げネズミですか。

平井 あんたら書生にとつては篤志家なんだろうけど、あたしたち奉公人にとつては、徳のある雇い主だと感じたことはないよ。―いい気味だったよ、予告状が届いたときの慌てぶりを見た時は。胸がすーっとしたね。二十面相は日本中の富豪からしか盗まないって言うじゃないか。きっとさ、そこにいる女中たち、みーんなそう感じていると思うよ。

遠山 現代版鼠小僧ですか？

平井 ああ、そうだね。たった一人で盗み入り、狙ったお宝を手に入れる。

本明 一人で…

平井 人を傷つけたり殺したりする残虐なことは一度もしたことがないって言うし。

遠山 今までに一度も？

平井 (藤原に) 聞いたことないね。

藤原 (頷く) これで、僕たち庶民に盗んだ財宝を分けてくれたら、本当に義賊なんだろうけど。

遠山 美術品とかは分けられないからな。

平井 いや、どこかで売り払って、貧しい人たちを助けてるかもしれないよ。

遠山 所詮は悪党。鼠小僧と同列と捉えるのはちよっと。自分の身を護るためなら、殺人も躊躇しないかもしれない。かの大泥棒、石川五右衛門のように。

本明 鼠小僧に石川五右衛門か。

平井 二十面相はそんなことはしない。

遠山 平井女中長。

平井 何、その呼び方。

遠山 ずいぶんと賊の肩をもつんですね。

平井 もってるわけじゃないよ。

遠山 なぜ、そう思うんですか？

平井 あんたたちが殺されてないからさ。

遠山 ん？

平井 案外、鈍いね。―夕べ、二十面相をあんたたちで追いかけたでしょ。そして、もう少しで捕まえられるところだったじゃないか。一回、二十面相の肩に触ったのもいってよ。あれは、誰？―藤原君？

藤原 惜しかったんですよ。前につんのめりながらも必死に掴みました。

平井 運がよかったですよ。二十面相が残虐な奴だったら、すぐズドンだよ。

藤原 その可能性は考えていなかった…

平井 おめでたいもんだ。―まあ、殺しは二十面相の美学に反するんだろうね。本明（ちよっと愉快そうに）「エステテイク（仏語）」とききましたか。

平井 エス？ 本明ちゃん、なんだって？

本明（満足そうに）続けてください。

平井（怪訝そうに）そう。

遠山 殺しはしないことは分かりました。他には、特徴はありますか？

平井 予告状。

遠山 予告状？

藤原 二十面相は盗みに入る家に、必ず前以って、お宝を頂戴に参上するという予告状を送るんだ。

平井 大したもんじゃないか。賊ながら不公平な戦いはしたくないって心掛けているってことだろ。

藤原 忌々しい警察への挑戦状ともとれる。捕まえられるなら捕まえてみることも。痛快、痛快。

遠山 いくら用心しても、必ず盗むことのできる腕前を誇示したいだけでも考えられますがね。

平井 ワーワー文句たれてるより、有言実行の二十面相の方が素敵だけどね。

遠山 なるほど。―一つ、分かったことがあります。

平井 なんだい？

遠山 平井さんは俺たちのことが嫌いだということが。

平井 違う違う。―役に立たない奴が嫌い。

遠山 がんばりましょ。

本明（遠山に）探偵君、収穫はあったかい？

遠山（満足そうに）それなりに。

本明 それはよかった。―平井さん、そろそろ、事件のあらましを。―私たちは、ずっと二十面相が現れたときに備えて警備をしていたので、屋敷の中でどんなことが起きていたのかわからないんです。

平井 三週間前、二十面相からの予告上が届く少し前に、ボルネオから手紙が届いた。

本明 それが、十年前に家を出て行った壮一さんからの手紙ですね。

平井 そう。奥様の喜びようと言ったら：

遠山 しかし、それは二十面相による巧妙な罠だったわけだ。

平井 そうだね。

本明 それからの三週間は私たちも知っている。

遠山 近藤老人なんて、大騒ぎだったな。

藤原 番犬にと猛犬を買って。

平井 あいつへの餌やり、小屋掃除は、誰もやりたがらなくてね。すぐ吠えて

遠山 ジョンという名前が。

平井 ジョンでもジャンでもなんでもいいよ。あんな犬畜生。

遠山 意外に愛嬌ありますよ。

平井 面倒見てないからそう思うんだよ。最初から可愛げが全くなくてね。

藤原 ジョンはドーベルマンという犬種だったかな。とても利口な犬です。

平井 どこが。顔を見るだけでも蹴りたくなる。

藤原 ドーベルマンという犬はドイツの犬で、警察犬、護衛犬、軍用犬として飼われるんです。鋭い嗅覚と聴覚で、侵入者を――

本明 藤原君。

藤原 なんだい？

本明 だったら、なぜ、夕べの大捕り物に、ジョンは加勢しなかったのだ？

藤原 確かに。――いたら、捕まえていたかもしれない。

平井 寝てたんだろ。はあ、ただ飯ぐらいが、他にもいたよ。

本明 そうでしょうか？ あの近藤執事が主家のために用意し、訓練もしていたジョンが、なぜ？

遠山 本明君、ジョンの話題をもう少し続けるかい？

本明 ―すまない。続けよう。

遠山 承知した。――昨日、十年ぶりに壮太郎氏の長男、壮一さんが帰って来た。――まあ、この壮一さんは二十面相が変装していたのだが。

藤原 しかし、そうだとしても実に颯爽たる姿だった。

平井 焦げ茶色のダブルボタンのスーツ、折り目の正しいズボンがスーツと長く見えて、映画の中の西洋人みたいだったよ。同じ焦げ茶のソフト帽の下に、帽子の色とあまり違わない、日に焼けた赤銅色の肌が精悍さを感じさせるんだけど、奥様譲りの端正で美しい顔つき。うちの子たち、全員、見惚れていたからね。

藤原 身長は僕と大して変わらないのに、雲泥の差だ。

平井 書生の分際で比較することじたいおこがましい。

遠山 夕食会も大変、盛り上がったんでしようね。

平井 奥様、自ら料理の腕をふるったからね。――(本明に) すごかったろ？

本明 そうですね。

遠山 どうして、君が知ってるんだい？

本明 二十面相からの電報を届けたからさ。

藤原 君が？

本明 (扉の方を見ながら) 吉田さんが受け取った電報を私が持って行った。

平井 (苦々しく) 晩餐会の途中にね。――奥様の残念そうな顔といたら、本当にむごいことを――

本明 責めないでください。中身が二十面相からなんて知らなかったんですから。

遠山 その電報にはなんて書いてあったんだ。

本明 知るわけないだろう。――壮太郎氏への電報は、届けてすぐ部屋を出て行く決まりだ。

遠山 確かに――

平井 「コンヤシヨウ十二ジ、オヤクソクノモノ、ウケトリニユク 二〇」。

全員が、平井を見る。

遠山 電報を盗み見したんですか？

平井 違うよ。壮一さん、いや、壮一さんに変装した二十面相がああ場にいる全員に読んで聞かせたからね。

藤原 正十二時というのが、ニクイな。午前零時きっかりに、盗み出すぞという確信に満ちた表現だ。

遠山 この電報、君はどう考える？

本明 二十面相が、壮太郎氏と二人きりでダイヤを置いている書齋にいるための仕掛けだろうな。

藤原 仕掛け？

遠山 同意見だ。

本明 赤銅色に日焼けしてみせたのも仕掛けの一つ。

藤原 日焼けがかい？

本明 ああ。精悍さを演出することです。

遠山 (割って入るように) 壮太郎氏に頼もしさを感じさせる。——そうだろうか？

本明 ああ。

藤原 壮太郎氏にとって一番信用できる相手に変装するとは、二十面相もやるなあ。

本明 それだけじゃない。我々を壮太郎氏から遠ざけた。

藤原 どういうことだい？

本明 二十面相は「行く」と書いている。となると、壮太郎氏にとっては外から「来る」ということだ。当然、屋敷の周りの警護を固めなくなる。これだけ広い、屋敷だ。我々三人と運転手の松野君、門前長屋に住んでいる警察程度では、屋敷の中まで手は回らない。

平井 なるほどね。

本明 二十面相が電報を読んで聞かせたのも意味があります。

平井 どんな？

本明 平井さん、その電報を聞いて、どう感じましたか？

平井 ……恐ろしくなったね。

本明 それを狙いです。

平井 え？

本明 女中の皆さんを部屋から出したくなかった。

平井 確かに！ 昨日の夜は、誰一人、大部屋から出なかった。

藤原 さすがだな、本明君！

本明 推理というのは、物質的な証拠、この場合は電報——と人間の実際の行動を結び付けると、おのずと真実が見えてくるものなんだ。

遠山 (咳払い) 講釈はその辺にしてみらい、続けよう。

本明 失敬。

遠山 壮太郎氏と二人きりになった二十面相は、その後、十二時にままとダイヤを盗み出した。

藤原 どうやって盗み出したのだろう？ 暴力的でないのは確かだろ？ だって、

壮太郎氏は無傷だった。―なあ、本明君。

本明 しかし、何か異変があったのなら、部屋の呼び鈴で我々を呼ぶはずだが、それはなかった。何かしらの奇術的な仕掛けがあったのだろう。

平井 そうそう。ダイヤが盗まれた後、旦那様がピンポン玉と拳銃を持ちながら騒いでいたよ。―おもちやの拳銃だったけどね。

藤原 おもちやの拳銃…。―本明君。

本明 呼び鈴を押さなかったのは、おそらく、それで脅されたのだろう。

藤原 ピンポン玉は？ ―本明君。

遠山 藤原君！ 君はすぐになんでも聞いて、恥ずかしくないのか？ 少しは自分で考えろということをしらないのか？ そして、本明君ばかりに聞くのはどうかと思うぞ。

藤原 悪かった…。遠山君。君は、どうやって二十面相がダイヤを盗んだと考える？

遠山 だから、すぐに聞くんじゃない。

藤原 考えたよ。ずっと、考えていた。―朝まで一人で見張りをしていたからね。

それでも、分からないから聞いている。

遠山 そうか…。―本明君からどうぞ。

平井 あんた、出世するよ。

遠山 ありがとうございます。

本明 やってみせた方が簡単だな。―藤原君、私の木刀を持って来てもらえないか？

藤原 木刀？ わかった。

と、藤原が本明の木刀を取りに行く。

そのすきに、本明はスキットルを取り、ポケットに忍ばせる。

藤原 どうぞ。

本明 ありがとう。―取ってきてもらったついでに、私も一杯飲みたいな。スキットルをもらえるか？

藤原 分かった。

と、藤原はスキットルを置いていたサイドチェストを見るが―

藤原 ん？ ない。―スキットルがない。

本明 ここだよ。

と、本明はスキットルを出す。

平井 はあ、なるほどねえ。

藤原 どういうことですか？

本明 簡単な奇術だよ。君をスキットルから離し、そのすきに隠した。奇術師は都合の悪いところから観客の注意力や推理力を他にそらせようとする心理的戦略

をよく行うんだ。―きつと、二十面相もそうやったのだろう。ピンポン玉でね。

藤原 素晴らしい！ まるで見えていたかのようだ！

遠山 俺も本明君と同じ意見だ。

平井 さすがだね。

遠山 (咳払い) さあ、続けよう。まんまとダイヤを盗んだ二十面相は、二階の書齋から花壇へと飛び降りた。

藤原 壮太郎氏の「誰かいないか。賊だ。賊だ。庭に廻れ」¹⁾との声で僕たちは、急いで庭へ。

本明 そういえば、あのとき、二十面相は何か必死にもがいていた。

藤原 確かに。あれはなんだったんだ？

平井 畏だよ。

遠山 畏？

平井 土蔵にしまっていた鉄の畏。大きな鋸目のついたやつ。こう、ガツチャンガツチャンする―

藤原 トラバサミ。

平井 そう、トラバサミ！ ―(呟くように) 痛たた：(右足をさする仕草)

遠山 (平井を横目で見ながら) 詳しいな。

藤原 まあ：

遠山 君のご実家は漁師ではなかったかい？

藤原 新潟の辺鄙な漁師町だ。山で狩りをすることもあった。

遠山 そうかそうか。

本明 それは初耳ですね。畏が仕掛けてあったんですか？ 誰が？

平井 壮二お坊ちゃん。

本明 壮二君が？

平井 昨日の朝、結構早い時間にあたしのところにきて、土蔵にしまっている畏を出したって言うんだよ。なんでも、二十面相が書齋の窓から飛び降りて逃げる夢を見たから、花壇に畏を仕掛けていれば捕まえられるかもしれないって。―最初はそんな子ども騙しと思っていたんだけどさ、まさか、本当に二十面相がかかるなんてねえ！

藤原 お手柄だなあ。そのおかげで、賊を庭に閉じ込めることができたのだから。

平井 それからの追いかけてこは、なかなかのもんだったね。

本明 手負いなのに、あんなに動けたのか？

遠山 傷の影響はほとんどないとみてよさそうだな。

平井 あたしたちも屋敷から電燈を庭にあてたり、応援したりしたけど、二十面相は速かったね。築山を登る速さなんて、弾丸かと思ったよ。

藤原 あれは、池の手前の木立だったか。―突然、二十面相が消えたんです。木立を一本一本、枝の上まで照らしてみただけれど、どこにも二十面相の姿はなくなっていました。

平井 扉をよじ登って逃げたとか。

遠山 四メートルもあるんです。それは無理でしょう。

藤原 屋敷内に逃げ込んだという可能性も。

平井 それこそ無理じゃない。

遠山 どうしてですか？

平井 あの時、洋館側はもちろん、日本座敷の雨戸も開いて、家中の電燈で庭を照らして、屋敷に居た者全員で追いかけてっこを見ていたんだ。こっちの方に逃げ込むことはしないとと思うけどねえ。

藤原 やはり、庭園の何処かに潜伏しているということか。――潜伏する場所か…木立に紛れる…枝の上、もしくは池の中。

平井 息が続かないよ。

藤原 こう、忍者のように。

と、竹筒を使って空気を吸う様子を見せる。

平井 そりゃ、いいね。

藤原 いや、ちよつと待てよ。――もう、脱け出しているという可能性もあるんじゃないでしょうか？ 例えば、気球を準備していて、闇に乗じて。

平井 庭に気球なんてなかったけれどねえ。

藤原 うーん…

平井 本明ちゃん、今何時だい？

本明は懐中時計を取り出し――

本明 七時ですね。

平井 そろそろだね。

本明 なにか？

平井 荘二お坊ちゃんと早苗お嬢様が学校に行く時間だよ。

本明 屋敷を出ていいんですか？

平井 警察がさ、学校は仕方ないって。

本明 お見送りですか？

平井 ん？ いや、一緒に車に乗ってお送りするよ。

遠山 珍しいですね。

平井 荘二お坊ちゃん、早苗お嬢様も怖い思いをしたろうからね。

と、平井が部屋を出て行くこうとするが

遠山 平井女中長。

平井 また、その言い方。

遠山 足、怪我したんですか？

平井 え？

遠山 ほら、右足のところ、包帯が見えます。

藤原 あ、本当だ。

平井 はは：ひねちまってね。

藤原 大丈夫ですか？

平井 大丈夫、大丈夫。すぐ、治るから。

遠山 ケガをしたのはいつですか？

平井 いつでもいいだろ。

遠山 話せない理由でも？

平井 ないよ。

遠山 いつ？

平井 二週間ぐらい前さ。

遠山 二週間も前に？

平井 なにさ？

遠山 すぐ治るって言ったから。

平井 年取ったからね、治りが悪いんだよ。あゝ、やだやだ。

と、平井は扉の方へ向かうが――

遠山 せっかくだから、私（わたくし）の推理を聞いていきませんか？ あまり時間はありませんから。

平井 出る時間を遅らせるわけにはいかないだろ。

遠山 普段は、浜口さんにまかせているじゃないですか。

藤原 しかし、遠山君。浜口さんは警察に辱めを受けて、心を痛めているではないか。

平井 そうだよ。それに今日は：いや、だから、あたしが――

遠山 いえいえ、こういう時だからこそ、いつも通りがいいんじゃないですか。

平井 ……

遠山 それとも、ここを出ていかなくてはいけない理由がありますか？

平井 ……

藤原 平井さん？

平井 ……分かったよ。

平井、しぶしぶと戻ってくる。

遠山 ありがとうございます。――どうぞ、おかけください。
平井 どうも…

と、平井はすすめられた椅子へ腰かける。

藤原 遠山君、二十面相が隠れている場所を突き止めたのか？
遠山 そうなるね。

藤原 本当か！？ どこに隠れているんだ？

遠山 落ち着きたまえ。(本明に) 君の出番はなしだ。大人しく聞いているんだね。

本明 大丈夫かい？

遠山 賊が逆上して襲い掛かる心配かい？ 無用だ。完璧な推理を聞けば、賊は俺の前に跪くさ。ペンは剣よりも強しだよ。―皆さん、私は、ある結論に至りました。―平井さん、どうかしましたか？

と、遠山は何か不貞腐れているようにも感じる平井に声をかける。

平井 早く終わらせて欲しいね。

遠山 潔いですな。

平井 は？

遠山 藤原君、君の言う通り、二十面相は庭園にはいない。

藤原 やはり！ もう脱出したというわけか！

遠山 いいや。―これから脱出をするつもりだった。

藤原 これから？ ということは、庭ではなく屋敷内に潜伏しているということか？

遠山 藤原君、二十面相という盗賊は見事な変装で壮一さんに化け、奇術師まがいの手品でダイヤを盗み、壮太郎氏を偽の銃で脅し、二階からひらりと飛び降り、七人と大捕り物を繰り広げた外連味ある盗賊だ。潜伏なんて野暮ったいことではないよ。―(平井に) これは、最大限、評価をしているということです。

平井 はあ。

藤原 ならば、どういうことになるんだい？

遠山 屋敷の中にいる―誰かに変装をしているということだ。

藤原 なんだって！？

遠山 警察もそう考えた節がある。

藤原 警察が？

遠山 げんに、君は確かめられたじゃないか。

藤原 あれは、警察が僕をからかうために―

遠山 結果的にそうなっただけだ。君が二十面相ではないと分かったからね。

藤原 それでは、一体誰に、誰に変装をしていると言うんだ？

遠山 待ちたまえ。―平井女中長、警察から辱めを受けたのは小松さん、浜口さんの他には、誰ですか？

平井 (無言で遠山を非難するような視線を向けている)

遠山 (意に介さず) おそらく、春山さん、木村さんではないでしょうか？

平井 ―そうだったかもね。

遠山 かも？ かもとはなんですか？ あなたはさつき、女中頭として親御さんから大切な娘を預かっていると断言していたじゃないですか。それを、知らないなんておかしいじゃないですか。

平井 はいはい。―そうだよ。その通りだよ。

遠山 ありがとうございます。――さて、藤原君。この四人に共通していることは？

藤原 皆、美しい！

遠山 そうくると思った。しかし、この屋敷の女中の皆さん、美しい。――本明君。本明 皆、身長が高めだね。

遠山 その通り！ 警察もバカじゃない。むやみやたらに脱がせていたわけではない。――では、なぜ高身長的女性だけに焦点を絞ったのか。――二十面相を男と決めつけたからだ。

藤原 ん？ なぜ浜口さんたちが脱がされなくてはならない？

遠山 変装を解いても変えられないものがある。

藤原 性別だろ？

遠山 いいや、それは違う。男が女性に変装をしている場合、変装を解くと男だと分かるだろ。逆も同じだ。変装を解いても変えられないもの、それは身長だ。だからこそ、高身長である彼女らは脱がされた。

藤原 つまり、二十面相が彼女らに変装した可能性があるかと？

遠山 彼女らは、君と同じぐらいの身長だ。

藤原 僕と？ なぜ？

遠山 君と同じぐらいの体格の人物がいたね。

藤原 壮一さんか！

遠山 その通り！――そして、その中身は二十面相だ。

藤原 だからか。

遠山 しかし、それが二十面相の畏だ。

藤原 畏？

遠山 変装を解いても身長は変わらないという思い込みを利用したね。――(平井に) 私は、二十面相は小柄な男だと確信しています。壮一さんに変装したときは、上げ底をしていた。

本明 ならば、二十面相は上げ底をした状態で我々と鬼ごっこをしたと？

遠山 トラバサミに挟まれたときに、上げ底し部分を外したのさ。だから、あんなに早く走れた。おそらく、二十面相本来の身長は――女中長、起立していただいても？ 平井 (しぶしぶ立つ)

遠山 鬼ごっここのとき、藤原君が肩に触ることができた。――藤原君、そのまま手を伸ばしてくれ。

藤原 こうかい。

と、手を伸ばす。平井の肩によりも高い。

遠山 普通はこうだが、君は、こう言ったね。前につんのめりながらも必死につかんだと。では、前に倒れこみながら手を伸ばしてみると――

藤原、言われた通り、前に倒れこみながら手を伸ばす。すると、ちょうど、平井の肩の高さに手が来る。

遠山 ほら。

藤原（触ってしまったことに驚き）すみません。

平井 一別にいいよ。

遠山 二十面相の身長はおそらくこのぐらいだろう。ありがとう、藤原君。―さて、二十面相は、実際は小柄な男だと証明することはできた。おそらく二十面相は、身長は変わらない、いや、身長は低くはならないという思い込みを利用して、まんなまと身体検査の網をかいくぐった。―この中で身体検査をしていないのは、私と本明君、そして：

遠山は平井に視線を向ける

平井 何さ。

遠山 平井さん、本当に藤原君が二十面相に触ったのを見たのですか？

平井 え？ 見たよ。電燈で照らしていたと言ったろ。

遠山 私たちから屋敷の方を見ても人影は分かる程度で、誰がどこにいるのかは分からなかった。しかしながら、肩を掴んだのが藤原君だと分かるのは、それはあなた自身が追いかけていたからではないですか？

平井 何言ってるの？

遠山 そうして、ダイヤの数だ。

藤原 ダイヤの数？

遠山 我々は、狙われているダイヤは一つだと思っていた。しかし、実際は六つだと言う。個数が重要なのは、盗まれる側と盗む側。その両者にだけ、「六」という数字が特別な意味をもつ。我々にとっては、個数はそこまで重要ではない。なぜなら、二十面相を捕まえることが重要だからだ。そんな我々が「六」を知るきっかけを作ったのは―あなたです。

と、遠山は平井を指差す。

遠山 つまりそれは、あなたが二十面相だということを証明しているのです！

藤原 平井さんが！？

平井 そんな馬鹿なことあるわけないでしょ！

遠山 認めませんか？

平井 バカらしい！

遠山 認めないんですか？

平井 認める認めないじゃない！

遠山 諦めなさい―

藤原 遠山君！

と、藤原は遠山を手で諫め、平井の前に歩み出る。

平井 なに？

と、藤原は目にもとまらぬ速さで最敬礼しながら、手を差し出し――

藤原 握手を――握手してください！
平井 はあっ！？

藤原は手を自分の衣服で綺麗にするためにこすり、もう一度、平井へ手を差し出し――

藤原 お問い合わせ！

平井 だから違うんだって！

藤原 安心してください。警察には言いません。

遠山 藤原君！

藤原 遠山君、そうしよう！

遠山 何を急に言い出すんだ！ びっくりさせるな！

藤原 二十面相殿が目の前にいる方がびっくりする！

遠山 何だ、「殿」って！

藤原 敬意を払っているのに決まっているだろう！

遠山 困った！ どういう展開だ！ なあ、俺達の目的は、警察よりも二十面相を

早く見つけ、彼奴等の鼻を明かすことだったろう。

藤原 気が変わった。二十面相殿は僕たちで護ろう！

遠山 君がリーダーではないだろう！

藤原 君もリーダーではないだろう！

本明 二人とも落ち着いて。――藤原君、どうして急に。

藤原 二十面相殿が目の前にいると分かったら：急に大切なものに思えてきた。

遠山 何を言ってるんだ！

藤原 警察に捕まえられるのは社会の損失だ。二十面相殿は、社会の必要悪だろう！

平井 ―この流れで言いづらいただけとお：あたし、ちがう。二十面相じゃない。

藤原 大丈夫です！ 遠山君は説得します！

平井 ううん、あいつ、的外れ。すっごい的外れ。

遠山 悪あがきをするんじゃない。

平井 あああ！ どうすれば、このうすらバカを！

藤原 何があっても護ります！

平井 藤原君、違う！ 違うの！ ―脱げばいいか？

本明 そこまでしなくて大丈夫です。

平井 本明ちゃん！

本明 遠山君、残念ながら君の推理は間違っている。

遠山 何を根拠に？ 足のケガ、身長の高さ、ダイヤの数を知っている。全ての状

況証拠が、二十面相が平井さんに変装していることを物語っている。Q・E・D、証明終了だよ。

本明 いいや、二十面相ではない。

遠山 証明できるのかい？

平井 やっぱり脱ごうか？

本明 大丈夫です。―できる。

遠山 ほう。それでは、ご教授願おうか。

本明 承知した。

と、本明が部屋の中央に―

本明 まずは、私の呼び方についてだ。

遠山 呼び方？

本明 変装がバレないためにはどうすればいいか。―人とできるだけ話さないことだ。―ただし、久しぶりに会う場合や初対面の場合などは積極的に話した方がいい。十年ぶりに戻って来た壮一さんのようにね。―二十面相がこの屋敷に侵入したのは壮一さんとして帰って来た昨日の夕方からだ。その時に、私が二十面相の前に表れ、かつ、平井さんもその場にいたのは一度しかない。―そう、晩餐会の時に二十面相からの電報を持って行った時だ。壮太郎氏をはじめ、羽柴家の全員が食卓を囲んでいる時に、平井さんがいつも通り私を「ちゃん付け」などするとは―？

平井 するわけないよ。

本明 つまり、二十面相は、平井さんが私のことを「ちゃん付け」していることを知る機会一度もなかった。―しかし、この平井さんは、部屋に入ってきてそうそうに私のことを「ちゃん付け」で呼んでいた。このことは、この平井さんが本当の平井さんであることを、自ら証明していることになる。補足をすると、誰が本明で、誰が遠山で、誰が藤原であるかもはっきりしていた。

藤原 確かに。

遠山 まて！ 俺は名前で呼ばれていないぞ。

本明 それは、君のことが嫌いだからだろう。

平井 その通り！

本明 嫌いなものとはことん嫌いなんですネ。

平井 あいつのご飯は、いつも肉・魚をちよつと減らしている。

藤原 本明君、それでは、ダイヤの数を知っていたことはどうだい？

本明 むしろ、私たちしか知らなかったことと考えるべきではないだろうか？ 私たちは壮太郎氏が美術品の類を取集する癖があったことすら知らなかったのだから。

藤原 なるほど！

遠山 ―あ、足のけがは、どう説明する？

本明 変装と身長の高さの関連付けは面白いアイデアだった。しかし、論として

は矛盾している。

遠山 矛盾だと？

本明 気付かなかったかい？ 上げ底ならば、今見えている包帯のケガの説明がつかず、ケガがトラバサミによるものならば、上げ底の説明がつかないんだ。

藤原 その通りだ！

遠山 それでは、そのケガは？ 二十面相でないならば、説明ができたはずだ。

平井 …それは…

本明 おそらく、ジョンに関係してはいますね？

平井 え！？ 見たの？

本明 いいえ、見ていません。―ただ、平井さんのジョンに対する物言いとケガをした時期とを結び付けると。

遠山 何があったというんだ？

本明 私から言いますか？ あくまで推理ですけども。

平井 ―分かった、言うよ。

本明 お願いします。

平井 本当に憎たらしい犬なんだよ。人の顔を見るたびに唸って威嚇してくるんだから。そのくせ、近藤さんだけに尻尾振ってね。あんまりに憎たらくて、餌持って行った時に、檻を蹴ったんだよ。そしたら、大きく吠えてさ。びっくりして―すっころんで、足捻ったの。

本明 だそうだ。

藤原 二十面相ではないのか…

平井 当たり前だろ！

本明 平井さん、他にもしているではありませんか？

平井 本当は覗き見しているんじゃないの？

本明 嫌いな相手にはとことんの平井さんですから。

平井 (観念して)―あの犬、嫌いな食べ物があるんだよ。なんだと思う？ ―梅干し。だから、時々、餌に入れてやってるの。出すたびに本当に嫌な顔してね。恨めしそうな顔でこっちみるんだよ。その顔見ると、スッって。昨日の夕飯も出してやった。

藤原 梅干しの種は危険ですよ。

平井 そうなの？

藤原 あれは、毒が入っていますから。

平井 で、でも、大丈夫よ。食べないもの。

遠山 平井さん、ジョンは二十面相に狙われるという難局を乗り越えるために、羽柴家へ来たのですよ。言わば、兵隊ですよ。いいですか、あなたがしたことは、支那との戦争で、お国の為に命を懸けて戦おうとする兵隊に向かって石を投げることと同じなんですよ！

平井 あれはただの犬畜生だよ！ あんたこそ、一緒にするんじゃないよ！ たいした推理もできないへっぼこのくせに！

遠山 へっぼこお！？

平井 へっぽこはへっぽこだろ！
 本明 まあまあまあ！ 落ち着いて！

と、本明が二人の間に割って入り―

本明 平井さん、私もあなたに謝らなくてはいけないことが。

平井 なんだい？

本明 実は、私も疑っていました。

平井 あたしが二十面相って？

本明 それは 아닙니다。私が疑ったのは、平井さんが二十面相の内通者ではないか
 ということです。

平井 内通者！？

本明 二十面相は様々な富豪から、美術品を失敗せずに盗んでいる。それには、協力者がいるのではないかと考えました。そこで、一つの仮説が浮かび上がってくる。二十面相は、それぞれの屋敷の女中を金で買収しているのではないかと。女中が一番、その家のことを知っていますから。屋敷の見取り図や状況、一日の流れ、そして、今回のように、袋のネズミとなつてしまった二十面相を裏から逃がすことも可能でしょう。―ジョンへ睡眠薬を飲ませ、大捕り物へ加勢させないことも可能でしょうね。

遠山と藤原が平井を見る。

藤原 内通者：（嬉しそうに）二十面相殿との繋がりが！

平井 そんなわけないよ！ あたしは、あの禿げネズミと犬畜生なんかどうなつてもいいけど、奥様は裏切らない。

本明 もちろん、平井さんは内通者ではありません。

平井（ほっとしながら）当たり前だよ。

藤原 僕は諦めたくないな！

平井 ちよつと！ 本明ちゃん！

本明 平井さんが二十面相の内通者ではない証拠があります。それは、壮二君が仕掛けたトラバサミを知っていたことです。

藤原 トラバサミ？

本明 あのトラバサミは二十面相の不意を突き、窮地に追い込み、現在の状況を作り出した。影の立役者と言っている。そして、平井さんは、トラバサミが仕掛けられていることを知っていた。しかも、二十面相扮した壮一さんが家に現れる前には分かっていた。もしも内通者ならば、必ず知らせるはずだ。知らせたならば、二十面相がトラバサミにかかることは絶対はない。しかし、実際はどうだった？ 二十面相はトラバサミにかかった。―どうだい？

藤原 合点がいったよ。見事だ。

平井 本明ちゃん、助かったよ。

遠山 まだ、納得がいかないぞ！

平井 何が何でもあたしを悪者にしたいんだね。

遠山 二十面相が変装している説は諦めよう。しかし、内通者という筋は消えたわけじゃない！

平井 あんたの考えじゃないだろ！ 往生際が悪いんだよ！

藤原 遠山君、どうしてそう思うんだい？

遠山 内通者はいるんだ！

平井 答えになってないよ！

遠山 そうでもなければ、盗みに入って一度も捕まらないなんて説明がつかない！

平井 本明ちゃんが言っていたら、あたしが内通者だったらトラバサミを伝えてい
るんだって。

遠山 トラバサミは伝えてはいたが、二十面相がただたんにしくじったのかもしれない。
ない。

平井 屁理屈だ！ それにあたしは大部屋の女中たちにはトラバサミのことは伝え
ていたんだ！

本明 本当ですか？

平井 本当だよ。

本明 いつですか？

平井 いつ？

本明 はい。

平井 いつって…晚餐会が終わって、みんなで大部屋に籠っていた時だよ。

本明 ！

遠山 いや、あなたが内通者だ！

平井 証拠はあんのかい！

遠山 それじゃあ、教えてください。

平井 何を？

遠山 屋敷を出て行きたがって理由を。

平井 (言葉に詰まる)

藤原 確かに、出て行きたがっていた。

遠山 内通者だからこそ、一刻も早く屋敷から抜け出したかったのではありません

か？ 二十面相も連れて、そうだ、二十面相と一緒に抜け出す気だったんでしょ

う！ 車のトランクにでも詰めて！

平井 ……

遠山 どうなんですか！？

部屋に訪れる静寂。

本明 今日が月初めの金曜日だからさ。

遠山 なに？

本明 (平井に) 月初めの金曜日だからですよ？

平井（驚いた顔で）知ってるの！？

遠山 月初めの金曜日がなんだ？

本明 朝市だよ。

遠山 朝市？ そんなの毎日やっている。

本明 今日は特別なんだよ。

藤原 特別？ 何があるんだい？

本明 私は、朝、よく散歩をするんだ。朝市を覗くのも好きでね。市井の人の営みを感じることができるんだよ。―吉祥寺の朝市だと、月初めの金曜日に虎屋が特売をしている。

藤原 虎屋？ 羊羹の？

本明 そう。平井さんは、自分だけ、虎屋の羊羹を買って、こっそり食べようとしていたのさ。

平井（小さくなる）

本明 当たりですか？

平井 女中の子たちには、少し分けるつもりだったよ。

本明 そうでしょうとも。

遠山 すると、なにか？ 平井さんは、二十面相が庭園の何処かに潜伏している状況で、朝市で虎屋の羊羹を買おうとしていたってことか？

平井 今日しかないから、仕方ないだろ。

遠山 どんな状況か分かっているんですか？

平井 何言ってるんだい！ あんたこそ分かっているじゃないんだよ。虎屋の羊羹がどんなに甘いのか！

遠山 羊羹が甘いぐらいは知っています。二十面相がいる、これは非常時なんだ。羊羹ぐらい、今日一日我慢すればいいじゃないですか！ 非常識にもほどがある！

平井 羊羹ぐらい？ あんた、ぐらいと言ったのかい！？

遠山 たかだか羊羹でしょうが！

平井 ふざけんじやないよ！ これだから書生は嫌なんだ！ あんた、今、世の中がどうなっているのか知ってるのかい！

遠山 知っていますが。

平井 上っ面だけね。皇紀二千六百年を四年後にむかえるだがなんだが知らないけど、万博だ、オリンピックだって、お偉いさんだけで勝手に決めて、あたしらの住んでる街を勝手に作り変えてるんだ。いい迷惑だよ。

遠山 それと羊羹とどう関係が？

平井 そんな中、男どもは、支那と戦争をおっぱじめようって言ってる。あたしたちの生活がだんだんと戦争一色になり始めてる。―壮二お坊ちゃんが読んでる少年倶楽部って雑誌がどうなってるか知ってるかい？ 表紙が兵隊になっちゃまっている。表紙だけじゃないよ。中身も全部だ。―おっかないよ。小さいうちから、

兵隊に憧れるように仕込まれてるんだから…。

藤原 平井さんは、戦争に賛成してるんじゃないですか？

平井 するわけないよ。

藤原（スキットルを持ち）だって、さっきお国のために働いたらって。

平井 バカ！ 兵隊になって戦争することだけがお国のために働くことじゃないだろ！ —満州手に入れて、生活がよくなったかい？ —朝市に並んでいる野菜、ちよつとずつ値段が高くなってるんだ。外国の酒は、店から少しずつ消えていってる。甘いモノだって、ちよつとずつちよつとずつ手に入り辛くなってきた。真綿で首を絞められているみたいさ。（遠山に）本しか読んでないあんたには分からないだろうけど、羊羹一つだって、大切なんだよ。

遠山 …すみませんでした…

平井 わかりやいよ。

遠山 平井さん、どうぞ、朝市へ。

平井 きっと、もう行っちゃまってるよ！

遠山 ええっ！？

平井 あんたのくだらない話でどれぐらい経ったと思ってんだい。—絶対、この借りは返してもらおうからね。

遠山（小さくなる）

平井はサイドチェストに向かい—

平井 あく、喉乾いた。誰かさんのせいでね。

と、水差しの水をコップに注ぎながら—

平井 （本明、藤原に）飲むかい？

藤原 いえ、僕は。

本明 ……

本明は顎に手をやりながら、じつと平井を見つめている。

平井 そうそう。二十面相が盗みに入ると、新聞が二十面相一色になるだろ。正直、ホツとするんだよ。嫌な記事目に入らなくなるから。—変な話だけどね。

と、コップの水を飲もうとすると—

藤原 待ってください！

平井（手を止め）なに？

藤原 あの、僕、警察が嫌いなんです。

平井 なんだい、藪から棒に。

藤原 生まれが新潟で。

平井 うん。

藤原 祖父から、コレラが流行したときの話を――

平井 コレラ？

藤原 はい。あのコレラです。新潟でもコレラが大流行したんです。明治のころですけど。祖父が漁師になりたてのときだったみたいですよ。

平井 コレラね。最近はとんと聞かなくなっただね。

藤原 新潟では感染予防のために魚、肉、野菜の販売が禁止されたんです。当然、漁師たちは仕事をなくしました。悪いことは続くみたいで、災害でコメの値段が高騰して、生活が立ち行かなくなりました。祖父たちは、米問屋を襲ったそうです。そのとき、警察と衝突して、たくさんの死者が出ました。「生きるために暴動を起こしたのに、あいつらときたら」と言う、祖父の顔が今でも忘れられません。――その話を聞いてから、僕は警察が嫌いになりました。

平井 ――そう。

藤原 だから、二十面相の活躍が新聞に載ると、胸がすく思いでした。あんなに威張り散らしていた警察たちをコテンパンにやっつけてくれる二十面相。まるで祖父たちの無念を晴らしてくれているみたいで。――きつと祖父が生きていたら、二十面相を応援していたんじゃないかな。二十面相は自分たちの味方だって。

平井 藤原君、どうしたの？

藤原 僕の実家は、本当に辺鄙な田舎だったので、変な噂も蔓延しました。コレラは何者かが井戸水に毒を入れたから流行したんだって。

平井 (コップを見ながら) 井戸水に：

藤原 入れたのはキツネだったり、外国人だったり、医者だったり、警察だったり、泥棒だったり：

遠山 さつきから何を言っているんだ？

――藤原は本明の目の前に歩み寄り――

藤原 平井さんが水を飲むのは止めないのかい？ (ため口だったことに気づき) すみません。――止めないんですか？

遠山・平井 ？

本明 何の話だい？

藤原 (遠山に) 一つだけ、引つかかっていたことがあるんだ。――なぜ、本明君は、僕が水を飲もうとすると、必ずとめたのか？

本明 とめてないよ。

藤原 直接的には。

遠山 確かに、俺が飲もうとしたときも、止めていたような。

本明 考えすぎだよ。

平井 話が全く見えない。

藤原 おそらく、この水差しには何か薬が入っています。――ジョンに飲ませたものと同じ薬が。――睡眠薬……もしくは毒薬が。

平井 ええっ!？

平井は急いで、コップを置く。

藤原 見損ないました。―血を流さないのが美学だったのではないですか？

本明は視線を外さずに藤原を見据える。

平井 え？ え？ え？

遠山 ほ、ほ、本明君が二十面相！？

藤原 はい。

本明 面白い。―根拠を示してほしいな。

藤原 僕が引っかけりを感じたのはフランス語です。

遠山 フランス語？

藤原 「エステティーク」

本明 それが？

藤原 遠山君は二十面相が現代版鼠小僧、石川五右衛門と言ったね。

遠山 ああ。

藤原 僕は少し違うんだ。きつと怪人二十面相は、怪盗アルセーヌルパンを参考にしているんじゃないかと思っていた。

遠山 ルパン？

藤原 フランスのルブランという作家が書いた推理小説の主人公さ。新聞を読むたびに似ていると感じていた。

本明 フランス語だけで、私が二十面相？ ちょっと乱暴すぎやしないかい？

藤原 明智探偵への物言いも引っかけかかっていた。「あのペテンまがいのもじやもじや頭」、「犯罪学者」―まるで知り合いのようだった。

平井 確かに！

本明 …。

遠山 しかし、いつ入れ替わった？

藤原 一晩中見張っていたと言っても、用足しにぐらい行くだろう。

遠山 行ったな。

藤原 おそらく、その時さ。

本明 それなら、遠山君だって同じ条件だと思うが？

藤原 遠山君の推理はポンコツすぎた。

遠山 失敬な！

藤原 それに引き換え、本明君の推理は完璧すぎた。ダイヤを盗んだ話なんか特にね。そして、忘れてはいけないのは、この本明君は部屋を出たがっていたことだ。

平井 そう言えば…

遠山 二十面相は血を流さない主義じゃなかったのか？

藤原 君が言った通りなのは？

遠山 俺が？

藤原 自分の身を護るためなら、殺人も躊躇しない。

遠山 なぜ、平井さんを？

平井 そうだよ！

藤原 誰でもいいのだろう。

遠山 それでは、俺たちが水を飲むのを止めたことと矛盾している。

藤原 時間だったんだよ。壮二お坊ちゃんたちが学校に出発するあたりを見計らって騒動を起こす。二十面相が毒をもった水を飲んで倒れたと。騒ぎに乗じて、屋敷から抜け出すつもりだったんですよね？

本明 藤原君、なかなか面白い推理だったが――

と、本明が動くこうとする。

藤原 動かないでください！

本明 待て。――落ち着け。――木刀を取るのはやめたまえ。暴力などではなく、話し合おう。

藤原 …それはあなた次第です。

藤原が木刀を取り――

藤原 動かないでください。――遠山君！

遠山 わ、分かった。

と、遠山も木刀を手にする。

本明 ―私が二十面相なわけがない。

平井 ちよつと…

藤原、遠山がじりじりと本明との間合いを詰める。

本明も木刀を手に取り――

本明 ―これは罠だ。

藤原 騙されません。

本明 ―二十面相の罠だ。

藤原 うわああああ！

と、藤原が本明に木刀で襲い掛かる。

と、扉の外にいる吉田が室内の不穏な雰囲気気付く。

吉田 もし！ もし！

と、扉を叩きながら室内に声をかける。
室内からは男たちの叫び声や何かを叩く音、そして女性の悲鳴が聞こえる。

吉田
もし！

そして、静寂が訪れる。

吉田が静かに扉を開けて、室内に入って来る。

室内では全員が倒れていた。

それを見た吉田は急いで部屋から出て行こうとするが――

本明
どこに行くんですか？

吉田は小さい悲鳴をあげる。

本明
びっくりさせる気はありませんでした。申し訳ない。

吉田
助けを呼びに。――ご無事だったんですね。

本明
無事なものも……なんともないですから。――全員。

吉田
全員？

藤原、遠山、平井が立ち上がる。

吉田
：

平井
本当にすぐ出て行こうとした。

遠山
いつ、君たちは結託したんだ？

藤原
平井さんが水を飲もうとしているときだよ。――本明君が、平井さんごしに目配せしていたからね。

本明
気付いてくれてよかった。

藤原
最初、何のことか分からなかったが、この仕草でなんとなく。

と、藤原が自分の顎に手をそえ、人差し指で顎を一定のリズムで叩く。

藤原
それに、木刀を取るように促してくれたる。――探偵が罠に引っかかる振りを
するのは定石さ。

本明
今から、二十面相を呼びに行くところですか？

吉田
私が？ どういうことですか？

本明
二十面相は庭ではなく、この屋敷のどこかに潜伏しているのだろう。

遠山
屋敷内に？

平井
吉田さんが二十面相の内通者ってこと？

本明
はい。

吉田
違います。

本明 そうくると思いました。―私の推理を聞いていただけますか？
吉田 …。

本明 沈黙は是認と捉えます。―私は、内通者は女中だと確信しています。女中はその屋敷の様々な事情に詳しいですから。しかし、買収するのは、一種の賭けです。平井さんのように、忠義をもって尽くす方も当然いますから。―そうになると、二十面相に息のかかった人物を潜り込ませるのが無難です。例えば、新人の女中といった形で。

吉田 …。

本明 私がずっと気になっていたことがあります。―それは電報です。

平井 電報？ 本明ちゃんが持ってきたやつ。

本明 はい。私は電報を届けた配達員を見ていないんです。玄関近くの部屋にいなから、呼び鈴すら聞いていない。

平井 あれ？ あの電報を本明ちゃんに渡したのは…

吉田 ―私です。

本明 内通者なら、機会をうかがい電報が届いたふりをするのは簡単です。

吉田 配達員を偶然見なかった、そう考えるわけにはいきませんか？

本明 そして、トラバサミ。

吉田 トラバサミ？

本明 壮二君が二十面相を捕まえるためにトラバサミを花壇に仕掛けていたんです。

吉田 …。

本明 知らなかったでしょう？ 女中で知らないのはあなただけです。

藤原 吉田さんが内通者だとしたら、なぜ、我々をこの部屋に閉じ込めたんだ？

本明 私たちがお互いに疑心暗鬼に陥って、同士討ちをさせるためだ。二十面相は一番体型に近い者に変装して、何食わぬ顔で外に出る。

吉田 …。

本明 あなたはずっと、この中でのお話を聞いていたはずだ。同士討ちをはじめのを今か今かと待ちながら。―違いますか？

吉田 …。

本明 もしも違うなら弁明を聞きますが。

吉田 …。

遠山 見事だ。

本明 ありがとう。

遠山 いつから怪しいと？

本明 最初から怪しいと感じてはいた。

遠山 最初から？

藤原 さすが名探偵だ！

本明 確信したのは、平井さんが大部屋にいる女中の方々にしかトラバサミのことを話していないと言った時―

突然、吉田が笑い始める。

一同、啞然とする。

吉田 申し訳ございません。みなさんの、特にも今の推理、面白かったです。

平井 え？ 二十面相？

吉田 まさか。

平井 内通者？

吉田 いいえ。―吉田は偽名です。

平井 だれなの？

吉田 明智小五郎の家人、明智文代と申します。

平井 奥さん！？ 明智小五郎の！？

吉田 はい。

平井 明智小五郎さんは？

吉田 主人は、先月から満州で起きている事件を解決しにいらっしゃいます。

平井 それじゃ、どうして？

吉田 羽柴氏が事務所を訪ねてきたおりに、ちよつと興味をもちまして。主人からは、事件にあまり首をつっこむなと言われていたのですが、羽柴氏に無理をいって女中として雇っていただきました。―二十面相を私の手で捕らえられればと思つていたのですが。

平井 だから、夜な夜な旦那様の部屋に：

遠山 さすが、明智小五郎の奥方だ：

本明 簡単に信じるな。明智の奥方である証拠は？ 証拠はあるのか？

吉田 団子坂の事件。あなたさまでしょう？ 明智が犯人であるという推理を披露してくださったのは。

藤原 (本明に) 明智探偵と知り合いなのか？

吉田 煙草屋に明智が間借りをしていた時、部屋を出て行く私とすれ違ったんですよ。―明智があなたさまの推理を楽しそうに話してくれました。―信じてくださいましたか？

本明 ……

吉田 沈黙は是認と捉えてよろしいのでしたね？―明智は寂しがつておりました。推理を論じ合うご友人が姿を見せなくなってしまうたことを。

本明 (乱暴に腰掛ける)

遠山 一つ尋ねたい。

吉田 なんでございましょう？

遠山 なぜ、俺達をここに？

吉田 警視庁の中村警部から、捜索は警察だけで行いたいと。―警察はあなたの方の中にある可能性も捨ててはいなかったのでしょうか。―私はいないと申し上げたのです。もしも変装するならば、この屋敷から出ることに不審がられない人物に変装することもお伝えしたのですが：―いかんせん、女の言うことですから。取り合つてはいただけませんでした。―こういうときに不便を感じます。―しかし、本当にお互いに疑心暗鬼に陥って、傷つけ合ったわけではなくてよかったです。―

お前ももったいぶるところがあると、また明智に叱られるところでした。

藤原 外では何が起こっているんですか？

吉田 二十面相はまんまと抜け出しました。

遠山 えっ！？ どうやって？

吉田 さきほど、庭で、縄で縛られた松野さんが発見されたとの知らせが。

藤原 運転手の松野君が？

遠山 屋敷から出ることに不審がられない人物か

平井 ……一緒に乗っていたら危なかった：

藤原 (吉田) あなたの予想通りだったわけですか：

本明 | 電報は？ 呼び鈴はならなかった！

吉田 明智が常々申していることがあります。「いちばんいい探偵法は、心理的に人の

心の奥底を見抜くこと」⁵⁰。

本明 ……

吉田 私は二十面相を捕らえたいと考えていました。

平井 あ…二十面相から電報が届くと思っていた。

吉田 ご推察の通りです。だから、玄関の外で掃除をするフリをしながら待っていたのです。| 配達員が手下の可能性もありましたから。

本明 (悔しそうに)「物質的な証拠なんてものは、解釈の仕方でもなるもの」⁵¹。だったか…

吉田 それも明智がよく申していることです。覚えていてくださったのですね。明智も喜びます。

本明 ……

吉田 二十面相の心理を考えると、運転手の松野さんが最適な人物だったのでしよう。| 失礼します。

吉田が出て行こうとするが—

吉田 ジョンですが毒殺されていたそうです。

平井 梅干しの種？

吉田 いいえ。二十面相が。

平井 |よかった。|よかったのかな…？

吉田 お疲れでしょう。お水でもお飲みになって一息ついてください。

平井 ……

吉田 その水差しには毒は入っていません。用意したのは私ですから。

平井 どうも。

吉田 本明さん、また、遊びにいらしてください。お茶の水の方に事務所を構えておりますので。

本明 行きません。

吉田 残念ですわ。|失礼します。

吉田は部屋を出て行く。
部屋に残った四人。

藤原 僕たちがいないところで、話はすすんでいたのか…

遠山 バカにしやがって…

平井 バカにもされていないかもね…

本明 ……

本明は水の入ったコップを取り、叩きつけようとするが、やめる。

本明 ……

そして、コップの水を勢いよく飲み干す。

三人はそれをただ見ている。

溶暗。

【終わり】

【引用】

ㄱ 江戸川乱歩『怪人二十面相 私立探偵明智小五郎』新潮文庫 三十九頁

ㄴ 江戸川乱歩『怪人二十面相 私立探偵明智小五郎』新潮文庫 三十九頁

ㄷ 江戸川乱歩『怪人二十面相 私立探偵明智小五郎』新潮文庫 二十頁

ㄹ 江戸川乱歩『怪人二十面相 私立探偵明智小五郎』新潮文庫 三十三頁

ㄺ 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』角川文庫 三十九頁

ㄻ 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』角川文庫 三十九頁